

オーラルヒストリーインタビュー

対象者：額賀 福志郎 氏

<略歴>（東日本大震災関係）

平成 27 年 5 月 自民党東日本大震災復興加速化本部長

日 時：令和 7 年 9 月 29 日（月）14：30～16：30

場 所：衆議院議長公邸

インタビュアー：飯尾 潤（政策研究大学院大学教授）、清水唯一朗（慶應義塾大学総合政策学部教授）

復興庁：佐藤 将年、荒金 恵太、村田 敦、陣内 舞子（復興庁復興知見班）

記録者：高山 修一（株式会社 KWC）

## 1. 東日本大震災発災直後の対応

### ・地震発災当日

○飯尾：最初に伺いたいのは、地震が起こったときについてです。どこでどうしておられましたか。地元におられましたか。

○額賀：地元にいました。あれは午後 2 時 46 分ごろだったと思うんです。地震があったときは、鹿島工業地帯にいました。それで、海沿いの日本製鉄〔住友金属工業（当時）〕の鹿島工業地帯を歩いていたら、地震で揺れたことで日本製鉄で火災が起きていました<sup>1</sup>。

○飯尾：そうでしたか。

○額賀：日本製鉄の方から煙が上がるのを見て、これは大変だなと思いましたね。その後、市庁舎から、みんな高台に避難してくださいとかそういう放送があったので、私も海岸淵にいたのですが、急いで高台の方に逃げました。

○飯尾：これは歩いて上がられましたか。

---

<sup>1</sup> 住友金属工業の鹿島製鉄所では、地震直後にガスホルダーで火災が発生していた。（山内哲夫「住友金属の鹿島製鉄所は火災鎮火も操業再開のメド立たず【震災関連速報】」『東北経済オンライン』2011 年 3 月 14 日）

○額賀：ええ、歩いて行きましたよ。その後、これは大変な地震だなと思ったので、津波を見ずにすぐその足で東京へ向かいました。神栖市という、鹿島〔臨海〕工業地帯のところから向かったんですが、道路が陥没していましたね<sup>2</sup>。

○飯尾：あの辺には、落ちた橋もございましたよね。

○額賀：だから、まっすぐ来れなかったんですよ。自分の車を秘書に運転させていたら、道路が壊れていたんで、東京に戻るのにも時間がかかりましたね。

○飯尾：津波の話なんかはその頃に、車中でお知りになったんですか。

○額賀：はい。ただ、鹿島工業地帯への津波の被害っていうのは、そこまででもないですよ。

○飯尾：ただ、茨城県内も液状化もありますしそれなりに被害が大きいところがございますよね。

○額賀：そうですね。相当な時間をかけて東京に向かいながら、これはもう大変なことが起きていると思いました。

#### ・災害対策本部の立ち上げ

○額賀：なぜ急いでいたかという、この災害では、自民党に災害対策本部をつくらなきゃならないという思いがあったからです。そうして東京に着いて、鹿島工業地帯とかも含めて全体的に見るような災害対策本部（平成23年3月11日大地震緊急対策本部、翌日3月12日に「平成23年東北地方・太平洋沖地震緊急対策本部」に改称）を、自民党で立ち上げました。それから、あれは野党時代で、当時の政権が災害を体験したことがなかったので、これはやっぱり経験があるわれわれがやらなきゃダメだという思いがありました。

○額賀：それで、翌日に自民党の議員で集まって、政府と一体となって対策を考えようっていう話をしました。そのとき私は災害対策本部の、対策本部長代理かなにかの役職をやっていたんじゃないかと思います。その後に来た、福島原発対策（原発事故被害に関する特命委員会）の委員長が私で、原発だけは私がやりました。

○飯尾：先生はこういった行政にお詳しくだったということですか。

○額賀：私は、エネルギー調査会長（自民党総合エネルギー戦略調査会会長）っていうのをやっていたので、原発とか、あらゆるエネルギー問題について自分が担当していました。

---

<sup>2</sup> 神栖市では液状化により道路の陥没等の被害があった。（神栖市役所「東日本大震災時の市内被害状況」<https://www.city.kamisui.ibaraki.jp/shisei/introduction/1002890/1002894.html>、（2025年11月27日閲覧））

○飯尾：党内の専門家として動かされていたんですね。

○額賀：ええ。災害対策本部の中でも、原発事案は私がやっていたんです。

○飯尾：当初からやられていたということですが、それで始められたところに、原発の爆発が起きましたよね。どう見ておられましたか。

○額賀：いやいや、これは大変だと思いましたね。対策本部とかを立ち上げたものの、放射線の問題だから、みんな経験がないわけです。

### ・福島への現地視察

○額賀：どうしようかと考えて、まずは現場に行かなきゃダメだと思いました。だけど、事故が起こった直後ですから、われわれがすぐ行っては足手まといになりますよね。当時、菅〔直人〕総理がすぐに行って批判されていましたが、われわれは1週間かそれくらい経ってから行ったと思います。それでも1週間目ぐらいで、早い時期でしたけどね。

○飯尾：どんな感じでおいでになったんですか。

○額賀：知らぬが仏で無防備だったので、福島原発の放射線量が高いところに防護服も何も着ないで行きましたね。それでバスから降り立ったら、線量計が吹っ切れました。

○飯尾：線量計はお持ちだったんですね。

○額賀：ええ。マイクロバスを降りたら、線量計がもう吹っ切れたもんだから、随行者から「もうマイクロバスの中に入ってください」というふうに言われました。まだ当時は、どこの線量が高いかもわからなかった。敷地内ではない、原発の事故現場から離れている場所で降りたのに、線量が高かったんです。

○飯尾：そういうことですね。これは自民党の先生方で一緒においでになりましたか。

○額賀：一緒に行きました。僕らは無防備で半袖姿で行ったものだから、降り立ってそういうことになったんで、とても驚いたんです。なんでこうなっているんだ、と感じたというのが最初の印象でしたね。

現地では遠方からぐるっと、原発被災地や原発施設があった辺りを回りました。ところが、当時は一般の車の立ち入りが禁止されていたんですよ。そこに特別に入って行ったもんだから、「皆さん、あまり顔が見えないようにしてください」なんて言われましたね。

○飯尾：これはやっぱり政治家の方だから。そういうことで、視察から東京に戻られて、党の方針とかをつくられるわけですね。

## 2. 原子力災害への対応

### ・関係者へのヒアリング

○飯尾：対策本部について、発災の年ぐらいで、何か具体的に覚えておられることはありますか。

○額賀：まずは、現状を把握しなければならないけども、どういうふう現場の話を知ろうかとか、そういう話をしていましたね。それで、福島原発事故の関係ですから、まずは経産省（経済産業省）から現状をよく聞こうじゃないかということで、経産省の福島原発の担当者たちを自民党の加速化本部に呼びました。あと、現場は放射線量が高くてなかなか行けなかったんで、現地の関係者からも様子を聞くほかないということで、東電（東京電力）も呼んで、それから日立（製作所）だとか、東芝とか、原発の建物を造っていて、建物のことを一番知っているメーカーにも、ヒアリングをしました。

○飯尾：原発のことは、普通はそんな細かいことまで調べられないけど、事故となれば、中の話も聞いたり、いろいろされたんですよね。そうすると、発災後の1年、2年というのは、津波よりも原発の方が関心の中心にお持ちでしたか。

○額賀：そうでしたね。放射線だから、そういうことの恐怖っていうのが知らぬが仏という人もいましたし、あんまりセンシティブじゃないと考える人もいたんですよね。

○飯尾：世の中でもセンシティブな人とそうでない人に分かれて、これが大変でしたね。先生は地元の茨城でも津波の被害がそれなりにありましたが、その面倒も見ておられましたか。

○額賀：茨城県の場合は、福島県と隣接県だけど離れているので、線量も低かったですし、福島県ほどではないですよね。ただ、海水の汚染というので漁業に影響があって、そういう意味での被災県でもありました。

○飯尾：そうですね。話が少し戻りますが、ヒアリングの際、地元の自治体の皆さんは、避難されていた方もあったと思いますが、例えば町長とか、村長とか、そういう人たちの話も聞かれたんですか。

○額賀：それはちょっと時間が経ってからです。やっぱり地元の市町村長さんっていうのは、当事者ですから、おそらく地元対応でお忙しかったので、われわれが呼ぶっていうことはちょっと無理でした。皆さんご自身も避難していて、自分の役場もないような状況でしたからね。こちらからもすぐに

行ったら混乱を呼ぶじゃないですか。彼らは、市民とか町民を助けることが先決ですから、われわれがこのこの行ったら足手まといになってしまうので、後から訪問をしました。

○飯尾：それはそういうことで、心配はしながら見ておられた。そんな感じですね。

#### ・原発事故の責任と住民避難

○飯尾：震災の年の暮れぐらいになると、事故も少し落ち着いてきて、原発の炉も安定するかなという季節になりました。その頃、国会では復興の補正予算とか、関連法案、主に津波の方で出ていましたが、印象的だったことはおありですか。やはり原発のことが気になって、あまりそちらの方は見ておられなかったですか。

○額賀：津波というと、私の地元ではそんなに被害がなかったですからね。それよりも、やっぱり原発を中心に見ていましたね。

○飯尾：事故の収束というのは、当時どういう予測をしておられましたか。今となってみれば、2回目の爆発はなしに済んでいるんですけど、当時はまだあるんじゃないかとか思われていましたよね。

○額賀：そうですね。想定外のことがずっと続いているもんですから、何が起こるかわからなかったです。何が起こるかわからないということは、近づけないということでもありましたしね。10年以上経った今でも、中のことは本当にはわからないから、当時はますますそうでした。

○飯尾：しばらくしますと、総選挙で安倍内閣になり、政権に戻られますよね。政権に戻られて、それでいよいよ、安倍〔晋三〕総理が復興加速化ということで加速化本部にされて、先生はその原発事故被害者の生活支援および産業再生に関する委員長になっておられました。

被災者の生活再建について、皆さん避難されているんですけど、当時どんなふうに思っておられましたか。元に戻れるのか、戻れないままなのかというような議論もされていたと思いますが、先生ご自身はどんな感じで見えておられましたか。

○額賀：線量が高いから戻って来れないということは、除染をしたら戻れるってということになるんですけども、震災直後はそこまで考えていなかったですね。ただ、1年2年経ってくると、だんだんその話になってきました。被災地の皆さん方は、やっぱり生まれたところに帰りたいと、潜在的に思っていますからね。潜在的に思っているけれども、汚染されたところを除染していかなければ帰れない。だけど、本当に除染は可能なのか、除染の金はどれくらいかかるのか、何年でできるのか、そういう話になるわけです。国費でそれをやるのか、東京電力だとか、そういう関係者に負担をさせるのか、こういう問題を解決しなければなりません。

○飯尾：それが大きな問題ですよ。そこは先生の大きなお仕事だったと思うんですが、どういうふうに考えて、どうなりましたか。

○額賀：最初は自民党の中でも様々な意見がありましたよ。これは東京電力が一番悪いから、東京電力を潰せなんて言う人も、東京電力を犯人扱いしている人もいました。僕は自民党総合エネルギー戦略調査会長なんかの経験もあったので、「東京電力を潰したら、誰が後始末するんだ」「そういうことまで考えるのが政治だ」と言って、そういう議論をしたのを覚えていますね。やっぱり東京電力にはちゃんと責任を果たさせるんだらうというのが私の立場です。

○飯尾：ただ、原発が止まっていると資力は増えないし、国有化みたいな格好になってきますよね。

○額賀：だから、そこもですが、後始末できる第一の責任者は東京電力で、その次はメーカーさんですよ。世間ではその後すぐに国の話が出てくることが多いですが、まずは現場が大切なので、メーカーさんたちにも責任を持って、仕事をやってもらわなきゃできないよなというのが私の考え方です。われわれは全体を仕切る立場として、そういう発想をしていました。

○飯尾：3年後には加速化本部の本部長になっておられますけど、だいたいそういう話をされるのが中心だったんですかね。

○額賀：そうですね。あとは、放射線量の始末と避難された方々でしょう。無理に避難をさせてしまったんですから、生活をどうにかしないといけないと思っていました。

あと、避難される方々にはですね、まずは福島県内で避難いただくべきだと考えていました。

○飯尾：県外だと居心地の悪さがあるかもしれないから、福島県内で皆さん暮らせるようにしたら良いというお考えですね。実際、郡山とかにたくさん移ったんですよ。

○額賀：結果的にそうになりました。県外への避難を、と言っている人もいましたが、福島県内に行ける場所があればいいんじゃないかと思っていましたね。口に出しにくいことではありますが、県外の一部の人たちにあった、放射線量が高い地域からあまり来てもらいたくないという気持ちや感覚も、ちょっとは考えないといけないなと思っていました。

### 3. 復興加速化本部長時代の取組

#### ・中間貯蔵施設の用地

○飯尾：当時、〔復興加速化〕本部長時代の時分だと思うんですけど、除染をした土の中間貯蔵施設についての議論が出てきていて、除染した土地を地元のそれぞれのところに置いていたら、これまた

置き場所もないという話がありました。復興加速化本部で、国の責任でやれといった提言をしておられますけど、これはなにかご記憶ありますか。

○額賀：これは、大熊町と双葉町が震源地で、原発の周りで、ここはもうしばらくは難しいと思っていたので、できるだけ除染をして綺麗にするために取り除いた土は、むしろここに集めて行くほかならぬと考えました。だから、周辺の幼稚園だとか、学校だとか、それから公有地だとか、そういうところの表土をとって、一番線量の高い地域に集めて、それを中間貯蔵地域するというかたちで進めていきましたね。

当時、大熊町と双葉町には、それぞれの地域に区長さんがいました。そこで、私は区長さんともう何日も一緒にご飯を食べて、とにかく双葉町と大熊町が震源地で一番線量が高いんだと。だから周辺の地域の表土を取って、そういうのは全部あなたの区域で預かってもらえないかと、そういう話をしました。

○飯尾：そのうち自宅の周りなんかも除染が始まりますからね。

○額賀：そうです。幼稚園とか、そういうところの表土を除染のために取り除いて、子どもたちが学んでいくことができるようにするんだ、それが政治なんだと。こういうことを、町長とも、あとは町内会長とか、区長と話していましたね。そして、その費用は国が出すべきだと、そう考えていました。

○飯尾：地元では土地を売ってくださる方も、それは嫌だけど貸すことはできるという方もいたり、そういう話がありましたよね。お酒とか食事なんかされると、そういう話が出たんでしょうか。

○額賀：出ましたね。そういったところにも我慢強く話をして進めて、国に対しても、必要な取組みを行うよう提言をしました。

#### ・帰還困難区域の将来像

○飯尾：その翌年には、帰還困難区域における中長期的な将来像というのを策定すべきだという提言を出しておられます。これは、後から見ればそうですけど、当時は将来像といっても、先ほどお話したようにすぐに戻れない。そういうなかで、どんなふうに思っておられましたか。

○額賀：なかなか線量が高いところは戻れないけれど、エネルギー政策のなかでも、とりわけ原子力は国策じゃないですか。民間企業で動かしてはいるけれど、国策上の民間企業ですからね。これはやっぱり国が責任を持つべきだと、長年のいきさつもあって潜在的には思っていました。

○飯尾：そう思っていた。ところが、起こらないはずの事故が起こってしまった。どうするかということで、やっぱり住民の皆さんに、将来の姿を示さないといけないというように思われたんですね。

○額賀：エネルギー政策は国策です。特に石油とか石炭とかじゃなくて、原子力の場合はそうじゃないですか。とりわけ国が責任を持つべきだと、政治家としては思っていましたね。

○飯尾：5次提言以降が額賀本部長時代の提言ですね。最初は2015年になりますけれども、避難指示解除準備地域とか居住制限区域の避難指示を6年後までに解除をせよという提言をされていました。これはなにか覚えておられることはありますか。

○額賀：先ほどもお伝えしましたが、地域住民というのは、生まれた故郷に帰ってきたいっていう潜在意識があるんですよ。人間の、生まれた故郷に帰りたいというある意味、執念的なもので。だからこれを取り上げるということはしない方がいいよねと考えていました。

○飯尾：この提言に期限を設けられたのは、目標に向かってみんなで努力するという意味ですか。

○額賀：そういうことですね。目標をつくらないと、役人ってやってくれないんです。加速化本部の提言に6年後と記載したら、それに合わせて役人は頑張るから、これはしっかり書き込むべきだと考えていました。本当に6年でできるのかという意見もあったんですけど、人間って目標を持つと、その目標を達成するために努力するんですよ。努力してできなかったとしても、状況の変化が起こるかもしれない。その過程で、技術革新的なものがあって可能になるっていう希望が見えてくる場合もありますし。

○飯尾：そのお考えから、そのことを書き込んで提言されたということですね。そういう気持ちを提言の文章に、額賀先生自身が書いて示されたことはありますか。

○額賀：あったと思います。前文と結びだったかな。私は、新聞記者として生活していたので。

○飯尾：初めと終わりにちょっと文章の感じが変わっているのは、先生がお書きになったからでしたか。元々、お書きになることは得意でいらっしゃるんですよね。

○額賀：得意ではありませんが、まあ、慣れていましたね（笑）。やっぱり役人の文章じゃなくて、心の通った文章が大切で、気持ちが入ってないのはダメだと思っているんですよ。それが提言としても伝わるように、私の方で文章を書きました。

○清水：この6年というのは面白い期限の設定だなと思うんですけど、どうしてこの期間にされたのでしょうか。

○額賀：だいたい5か年とか、10か年とかってなるじゃないですか。あれは確か、発災から10年後を目標にするということで、6年ってなったんだと思います。結局人間は、目標をつくらないと努力しないんですね。だから、何年までにやるんだとかの目標をつくると、それまでに完成させよう、できるならばそれより短縮させようというふうに頑張れるだろうと考えました。

○清水：短くするところも射程に入っていた。そこに向けてみんなで努力するということがなんですね。

○復興庁：帰還困難区域の関係では、議長の方から、拠点区域を設けるとか居住区域を設けるとかして、帰れない区域に帰れるように、政府で法改正とか予算措置を進めるようご提言をいただいたんですけども、それに至るまでの思いやきかけについて伺いたいです。

○額賀：国が原発というエネルギー政策を推進したことがきっかけなので、何でも国が面倒を見たほうが良いと思っています。民間事業では、なかなかできないですからね。小さな事故はあるけども、こういうふうに大きくなってしまうと、企業で解決するのは難しいですから。

#### ・ 除染に関する各町長へのアプローチ

○清水：先ほどの除染の表土を取るというお話のところを伺いたいですけれども、双葉と大熊のところに集めるんだというのはお話でよくわかったんですが、それを区長さんや町内会長さんは、受け入れられたんでしょうか。

○額賀：いえ、それは説得ですよ。

震源地の双葉町とか大熊町は、線量が高いですよ。そこから何キロメートル以上離れたところが、だんだんと線量が薄くなっていくのは自然でしょう。もちろん遠いところで線量が高い地域もありますけどね。だから原則的に、線量が薄いところの表土を取って線量が高いところに持っていけば、幼稚園とか小学校の施設だとかが使えるようになったり、活用できる範囲が広がるではないかという考えでした。やはり、学校施設が使えるっていうのは、地域にとって重要ですから。普通の幼稚園とか小学校とか公有地で、表土を5センチぐらい取れば校庭が使えるようになるよね、公民館も使えるようになるよねとか、そういった活用の話もしながら説得を進めていましたね。

あと、私は現場主義なので、大熊町にも双葉町にも対策本部として何回も行って話しました。町長だけではなくて、町内会長だとかそういった方々のところに行って、一緒にお酒を飲みながら、じゃあ一晩、本当に悩んでることを聞かせてくれ。酒を飲みながら、酔っ払った勢いで言ってみろというようなことをやっていたんですよ。普段、茨城に戻って地元でやっているようなコミュニケーション

とも近いのですが、そういうのをやらないと、本音は言えないから。格好つけた話だけでは、住民を救えないじゃないですか。

○清水：これは、自民党の支持者であるか、そうでないかというところは関係ありましたか。

○額賀：そこは関係ないですね。

○清水：関係なく皆さんが集まってきて、そういう形になるんですね。

### ・原発事故の賠償責任

○清水：東京電力であったり、日立・東芝だったり、そういうところを犯人扱いしないで、むしろ彼らがきちんと責任を果たさなきゃいけないんだというお話がありましたが、今度は賠償の話が出てきますよね。どんなふうにご覧になっていましたか。

○額賀：東電だって、機械を作った日立だって東芝だって、責任の一端は背負わなければならない。それはそれとして、当然のことです。

まず責任を取らせるのは、自分で原発を動かした東京電力で、彼らが事故の責任をどうやって果たすのか。それから、メーカーとしての東芝、あるいは日立らはどうするのか。機械を作ったのは彼らなんだから、ちゃんとこれをきっちりやりなさいと、まずこの責任を果たしてもらうのは当たり前だよなと思っていました。ただ、生活の補償、賠償の部分っていうのは、また別の次元の話で。

○清水：被災者からすれば、当然、できるだけ賠償は欲しいと思いますでしょうし、さきほどのお話からいけば、会社は潰さないでいくべきというところのせめぎ合いがありますね。

○額賀：おっしゃる通りで、会社は潰したら後始末ができないので、会社を潰すこととそれはまた別次元の話なんですね。だから、東京電力も日立とかも、経営者として、あるいはメーカーとして責任を果たすのは当然です。あと、民事的な問題は、また民事的な問題として考えなければいけない。

○清水：そういうことですね。先ほどのお話では、東電の方たちとかも、本部に呼ばれてヒアリングをされたとのことでしたが、その場にはどんな方を呼ばれたんですか。

○額賀：社長とか、会長でしたね。小早川〔智明〕さんとか、それから実務を分かっている方です。

### ・広域的な視点でのまちづくり

○清水：今のお話が、最初に本部長として提言された5次提言についてでした。その次に、福島の復興再生特措法（福島復興再生特別措置法）が改正されて、沿岸地域にイノベーション構想をつくったりしたんですよね。

あとは、7次提言は割と大きいなという感じがしています。ちょっと見てみますと、「防災等の地域の課題に対して、広域的な観点を踏まえた対応を所要の体制のもとで進めること」とあって、広域という話が出てくるようになりました。この広域というのは、東北全体ということですか、あるいは福島の広域、相双地域ということでしょうか。

○額賀：広域ってというのは、例えば原発が置いてあった双葉町とか大熊町とか、それぞれの町単位ではなくて、双葉郡全体でどうなのか、あるいは福島県全体ではどうなのかを考えるという話ですね。町ごとに自分たちの要望だけを言って、町単位で考えるのではなくて、もう少し広域的に、後々の発展のためにバランスよく整備していくのが当たり前だろうと考えていました。町ごとにやっていたら小さな町に大きなものをいくつも作っていくようなことが起きてしまうから、ダメなんじゃないか、という発想です。当時の要望は町ごとに町長が来て、それに対応するかたちだったんですね。

○清水：これは、例えば浜通りでとか、双葉郡でとか福島県で来てください、ということになると、彼らは、まとまってくれたんですか。

○額賀：それが、これからやるべき話なんですよ。これからの復旧復興は、そういう考え方でやってくださいよということで提言しました。大きなものを町ごとに作っていったって、非効率じゃないですか。いくつも同じようなものができたりとか、無駄がちょっと見えてきている感じもあったんですね。

○清水：確かに、現実にはそれは、今も運営の費用の問題にもなっていますよね。

○額賀：町単位でやるべきものもあるけれど、無駄な投資はしないように、そこはちゃんと考えてほしいということです。町ごとにいろんな施設を作ったって、それは無駄な投資になってしまうじゃないですか。

○清水：面白いですね。さきほどの除染土の話では、本当に小さな自治会のレベルのところまで行って説得をされて、ただ、一方でその要望を上げてくるときは、全体像を考えるべきだということを伝えられるということですね。

○額賀：それは、もちろんそうです。

○清水：今のところが7次提言ですが、翌年の8次提言では、各県にある国営の追悼施設をいつまでに作るかというお話があって、さらに次の9次提言だと、津波や地震の災害の工業インフラの方の復興を完遂するということが言われています。この辺りは、どんなふうにご覧になられましたか。

○額賀：福島で、東日本大震災よりものすごく前に、明治や昭和の時代にも津波の被害があって、そのときにやられたものをよく見に行くと、そういう中でどのように建設すべきかというところを意識

するようになりました。そういうことは、まちづくりでもよくあって、すぐに逃げられるようにするために、高台に住居地域を、海岸近くに商業地域を分断してつくとか、きっとそういうことをいろいろ考えてもらっていたんじゃないですかね。

○清水：そうすると、かなり多様な復興の様相が出てくるわけですね。

○額賀：そうですね。あとは、そういう災害の形跡みたいなのは他の県にもあって、宮城県だったか、過去の津波がここまで来ましてというのがわかるものがあるということで、見に行ったんですけど。昔の被災の経験があって、遺跡みたいにそれが残されていたのを覚えています。

### ・災害時の政府の体制

○清水：加速化本部の中では、どのように役割分担をされていたんですか。額賀さんは本部長としていらっしゃるわけですよね。その後というのは、どういう形になって、どんな指示の仕方をされていたのかなど。

○額賀：復興〔加速化〕本部は、〔自民党総裁の〕直轄で。

○清水：カウンターパートからいろいろ要望を聞いて議論をして、復興本部で方針がまとまると提言が出て、それ以外のところは、各省庁さんとかと具体的にやり取りをされたりとか。

○額賀：いえ、復興本部は各省庁がその下にいるので。

○清水：そうなんですね。そうすると、本部長との間柄について、普段どのようにしてお仕事をされてたんですか。

○額賀：私は予算をつけました。政府の体制という話でひとつ関連して、東日本大震災の教訓を活かすために、今後の大規模災害に備えて災害対応の機能を一元化して、政府の体制を構築、強化すべきということも提言しました。それで、災害発生時に集まる各省庁のメンバーを、内閣官房の危機管理監の下に平時から集める会議が新たにできたんですけど。私はこの司令塔は、事務次官経験者である危機管理監にやらせるべきだとずっと考えていました。事務次官経験者でないと、各省庁の事務次官に命令できないじゃないですか。危機管理監なら電話1本で各省庁の事務次官に命令ができる。そういう理由で、このような形になりました。

### ・ALPS 処理水と関係者への対応

○清水：次に、9次提言、10次提言、11次提言という形になってくると、今度はALPS〔処理水〕の話が出てきますね。ALPSの話は漁業の関係もありますし、いろいろ考えられたと思います。

○額賀：漁業の関係だと、お金の問題はありましたね。私は財務大臣経験者だったので、お金を用意してもらおうと言いましたが、全部で1000億円か、それくらいの金額でしたよね。

ALPS（アルプス）処理水を海に放流するかどうかという話も当時はしていて、どのようにすべきか、方針を決定するように政府に提言しました。これは科学的に言ってもあまり問題がなくて、「放射性物質の濃度も」国の安全基準値より相当低い、何十分の一ぐらいの水準で放出することになったんですよね。

○清水：提言としては、政府が関係者の意見を踏まえて責任を持って、しかも早く決めるということ言われていたわけですが、そのあたりの意図というか、なぜそういう形になったのかということ伺ってもよろしいですか。

○額賀：線量の高い処理水を出すわけにいかないの、その線量を下げたための科学技術を活用すると同時に、あとは、水産業界の皆さん方の理解を得ることが必要でした。当時の水産業界のボスは、島根県の岸〔宏〕さん（全国漁業協同連合組合元会長）でしたね。関係者の方々と何度もお会いして、線量の説明や、何かあった時は国で全部対応しますからという話もして、自ら直接説得をしていました。

それから、財務大臣の経験者として主計局長に交渉して500億円ぐらいの基金を作って、政府がなかなか決めなかったんで、政治の方から方針を決めるようにという提言もして。それで、当時の総理大臣だった安倍〔晋三〕さんに、これでやってくれと言いに去了。

○清水：科学的な根拠が示されても、ある種一番怖いのは風評被害ですよね。そのところは、その基金で対応していくということなんでしょうか。

○額賀：そうですね、なにかあったら補償しますということで、基金をつくったわけですよ。

○清水：その後、日本国内も風評被害がそれなりにありましたけれども、やっぱり海外に向けた輸出というところで、この後少し影響が出ました。

○額賀：韓国とか中国とかでありましたね。だいたい嫌がらせですよ。こちらからは、安全ですよ、汚染水ではなくて処理水ですよ、と言っていましたし、処理水を見に、検査しに来てください、ということは伝えていましたけど。その辺の関係では、各国と役所を通じて調整しましたし、私個人としても日韓議連（日韓議員連盟）とか、日中関係に関わっていました。

#### ・福島国際教育研究拠点への思い

○清水：9次提言のところの最初に、いわゆる F-REI（福島国際教育研究拠点）が出てきますよね。沖縄で OIST（沖縄科学技術大学院大学）がうまくいっているということもあって、こういうものが福島の被災地でできるというのは、政治がやってくれたことという感じもしますし、福島の方からも随分要望があったように伺っています。このあたり、どんなふうにご覧になっていらっしゃいましたか。

○額賀：私は「福島教育研究拠点」のように、名称に福島が付くことによって、福島問題だけに限定した教育研究拠点として矮小化されることを心配していました。財務省的な考え方で、これは福島の関係だけだよ、と捉えられてしまうことを、一番恐れていましたね。

その認識は違って、福島は地名の問題であって、これは国際的な研究拠点であるべきなんです。福島第一原発で起きたのは国際的な原発事故であり、国際社会の中で原子力発電をやっている国々ってというのが相当あるなかで、どこかで原発事故が起こったときに、福島がひとつのモデルとして世界に冠たる模範を示すことができるようになるためにも、その研究内容などが矮小化されることはダメだと考えていました。国際的な原発事故に対するモデルとして、どんどん強化をしていく必要があるというのが、私の思いです。

だから、福島っていう名前をつけるのは結構けども、福島だけのものとして、予算措置なんか、どんどん毎年縮小されていくようなことを恐れていたんですよ。財務省なんていうのは大体そういう習性がありますからね。

福島っていうのはただの形容詞とか、地域の名称じゃなくて、国際拠点としての意味を含んだ「福島国際教育研究拠点」なんだ、ということや、そういう意味だよ、ということだけは、強調していたんです。

○清水：一方で、福島という名前を付けるというのは、おそらく地元からの強い要望もあるわけですよね。でも、福島という名前をつけると、そうになっていくということなんですね。

○額賀：財務省的に言うと、そうですね。これは福島だけの問題ですよ。だんだんと予算が削られていくんですよ。財務省っていうのは、予算をどうやって多くしようではなく、どうやって少なくしようというスタンスなんです。

役所ってみんなそういうところがありますね。自分オンリーで、自分の省のことしか考えてない。

#### ・加速化本部の構想・復興と日本のエネルギー問題

○清水：ちょっと話が戻りますが、災害が起こって1年目は、本当に生活を支えるために大変だったとお伺いしました。そして、2年目に政権が自民党になって、額賀先生がいらっしゃった本部には、加速化本部という名称がつけました。

この加速化というのは、本部も含めて、なにを加速するべきだというふうに位置づけられていたのか。実際にはどのように加速をしたのか。最終的に、それを今、どういうふうにご覧になられているかという、3つに分けてお伺いできればと思っています。加速という言葉が使われていた意図と伺えますでしょうか。

○額賀：加速化といえば、まずは放射線量の問題でした。線量は、年次的に少なくなっていくものではありますが、人が住めなかったところを早く住める場所にするために、人為的に取り組んできたんですね。これは人為的に予算を付けないといけないことで、こういうのが加速化なんです。

○清水：生活を取り戻すための取組みに対して、予算をつける。

○額賀：生活圏とか、商売とか、そういうものを用意して、生業を取り戻す。生業を取り戻すだけでなく、将来の産業立地とか国際研究とか、そういうことも含めて加速化させるという意味です。

○清水：そうすると、最初は生業の加速だったのが、産業の復興だったりとか、新しいものの創生というところに、加速化の方向性が変わってきたということでしょうか。

○額賀：皆さん避難されたので、そうですね。

#### 4. 復興政策を振り返って

##### ・復興加速化を振り返っての所感

○清水：11次提言まで出ると、次は〔衆議院〕議長になられるわけですけど、加速化本部時代を振り返ってご覧になると、どんな形で復興は進んだのか、どんな課題がまだあるというふうにお考えですか。

○額賀：あの頃は皆、自分のふるさとを捨ててとまでは言いませんが、離れて避難生活をしていただけです。だから、戻ってこられるように、被災地で生業を取り戻すということを目指していましたね。生業を作るために、生活環境が新たに整えられて、教育施設ができて、それで勤め先ができる。そういうことにまずは取り組むと、そういうことだったんでしょう。

そのためには前提として、除染を加速化しなくてはいけない。エネルギーは国策で、それで事故を起こしてしまったんだから、国の費用で進めていくほかないだろうと考えています。

○清水：今振り返られると、加速化というのはしっかり進んだということでしょうか。

○額賀：そうですね。東京電力にしても、メーカーの東芝だとか、日立だとかにしても、一生懸命やったと思います。国を挙げて各社に対応を求めてきた訳ですが、彼らも責任感を持って取り組んでいると思います。

それから、おそらくこの事故の経験と教訓、技術力が、世界中の原発によるエネルギー政策を推進している国々において、通用するものだと思っています。今まで、こういう原発事故に対応する技術力を持っていたのは、イギリスなんですよ。僕らも、イギリスの原発事故があったところを見に行きましたが、彼らは相当な技術力を蓄積していたので、東京電力とか日立とか東芝とかは、彼らから技術提供を受けて、今度の事故の処理もしてます。だから、日本の経験とその蓄積も、次に国際社会でなにかが起こったときには、貢献できると思っています、これは今回復興を加速化したことでできたことでもあると感じています。

それから日本は、原発を自前のエネルギーとして位置付けていますよね。今、世界は自前の〔エネルギーがある〕国中心主義の国家群ですから、自前のエネルギーがなければ独立国家として成り立ちませんし、はっきり言って、日本の工業とか生活も維持できなくなると考えています。

○清水：そこがとても大きいんですね。

○額賀：日本にはエネルギーが何もありませんから。山が〔国土の〕3分の2ほどあるので、いざというときは、杉と枝と薪を燃やしてかまどでご飯を炊いて食べれば、自給自足はできますが（笑）。

#### ・日本のエネルギー施策

○清水：ここまで、主にできたところをお話しいただいたのですが、やっぱりこれは難しかったな、できなかったなというところも、できればお伺いしたいところです。

○額賀：こうした方がいいじゃないか、ああした方がいいじゃないか、ということについては、だいたいやったんじゃないでしょうか。日本人って、そういうところ器用ですしね。試行錯誤はするでしょうけども。

○清水：手強かったのはどちらでしたか。

○額賀：手強さで言うと、原子力発電所の事故の件があったけれど、やっぱり基本的には日本に自前のエネルギーがないよね、と。風力発電も、太陽光も日本のエネルギーを賄うことができないし、そうすると、日本のエネルギーってやっぱり原発なんだ、ということじゃないですか。風力も太陽光もない。あとは、地熱があるかもしれないか。そういうのを研究する必要がありますよね。火山列島だから。

○清水：地熱でうまくやっている国もありますからね。アイスランドとか。

○額賀：これはちょっと、力を入れて研究すべきでしょう。火山列島で海に囲まれていますから。あとは、海のエネルギーとか。海の波ってものすごいエネルギーがあるって言いますよね。

#### ・復興庁の後継組織に関する提言

○復興庁：復興庁の後継組織についてお伺いしたいです。当初は10年で終わりということだったんですけど、その後、復興庁を20年続けるようにと頂いたご提言をいただきました。そこについての強い思いとか、考えていたことはありますか。

○額賀：復興庁は、被災地のことを何でもやってきましたからね。それがなくなってしまうといけないということで、10年延長したんですよ。10年延長した後、これからの福島原発の処理は、おそらく発電所の後始末が中心になるんだと思いますが、これは20年とか30年とかかかるから、別の国家組織で廃炉とかをしなければいけません。いや、そんな程度ではできないかもしれませんね。いずれにしても、それは国でなにか別の組織をつくって、面倒を見ていくような形にしなければいけない。どこの機関でもできないから、これは国で最終処理を、ということでしょう。

○額賀：基本的に日本の政治は、エネルギーの問題について、国民の皆様方に対してあまりオープンにしてこなかったですね。国できちっとやるから、心配なくていいよという感じだったんじゃないかと思います。

　　だけど、国家運営の根本に関するエネルギー問題は、もう少し国民の皆様方に共有してもらった方がよかったと思いましたね。日本の自前のエネルギーは原子力で、エネルギーが何もないので、あとは海外から石油・石炭・ガスを買ってこなければなりません。自分中心の国家運営の世界で、いつ外国に供給を止められるか分からない中で、自前のエネルギーが原子力しかありません。そういうことを国民の皆様方に、問題として投げかけて、じゃあ安心してどんなときでも使える自前のエネルギーは何なんだ、やっぱり原子力しかないのかな、とか、そういうものを共有して考えてもらいたい。

○清水：国民も自分たちのこととして、一緒に考えるということですね。

○額賀：そういうことが必要かなと思いましたね。

○清水：そうですね。そういう土壌があってから大震災があったら、またちょっと違ってたでしょうし。それは今からでも遅くないですね。

○額賀：今からと言っても、他のエネルギーはないですけども。

○清水：この議論は進んできていて、国民の間に理解も進んではいるように思いますが、まだまだ十分ではないですね。

○額賀：あとは新しく、二酸化炭素の出ないエネルギーとか、いろいろなものが開発されてくるかもしれませんが、それにはまだ時間がかかります。いつの時代になるかわからないところもありますね。

○清水：ありがとうございました。

(了)